

げん し ばくだん げんばく し ▶ 原子爆弾(原爆)を知る

原爆は、広島と長崎にいた人たちの命を一瞬のうちに奪い、
生き延びた人たちの心と体をも長い年月にわたって苦しめた爆
弾です。



提供: 広島平和記念資料館
撮影: アメリカ軍

● 熱線による被害:

- ・ 空中に発生した火球は、1秒後には半径200mを超えた
- ・ 爆発直後、爆心地周辺の地表面の温度は3,000~4,000度
(鉄の溶ける温度は1,500度)

- ・ 強烈な熱線で焼かれた人々は重度の火傷を負い、多くの死者が出た

● 衝撃波と爆風による被害:

- ・ 爆心地近く秒速300m (時速1,000km以上) であった
- ・ 壊れた建物の下敷きになった人も多かった
- ・ 吹き飛ばされた様々な破片が散弾のように体に突き刺さった

● 放射線による被害:

- ・ 吐き気、下痢、頭痛、発熱、脱毛、倦怠感、吐血などで苦しんだ
- ・ 被爆後に入市して残留放射線によって死亡する人もいた

〔リーゼ・マイトナーを知っていますか?〕

リーゼ・マイトナーは20世紀後半に欧州で活躍した物理学者です。女性と
いうことで豊かな知識と探求心を活かす機会を奪われ、ユダヤ人として差別・
迫害を受け、自由も命をもおびやかされました。しかし、自らの強い意志と家
族や仲間の支えによって、研究を愛する人生をつらぬきま
した。そして、「核分裂」を発見します。マイトナーは、
この研究が原爆につながることに心を痛め、原爆を開発・
製造するマンハッタン計画の参加を拒否しています。彼女の
墓標には『人間性を失わなかった科学者』とあります。

2025年の広島で行われる国際会議、パグウォッシュ会議
では核兵器の廃絶に向けて約40カ国、約200人の科学者が
議論します。マイトナーの平和への思いが引き継がれてい
ます。



マリッサ・モス: 著
なかいがわいこ: 訳
中井川玲子: 訳
いわなみしよん
岩波書店

ヒロシマ

1945年8月6日8時15分

死者 約14万人 (昭和20 [1945] 年12月末)

深夜、早朝と二度の警戒警報は解除されました。一息ついた人々は、防空壕や避難場所から家にもどり、遅い朝ごはんをとったり、仕事に出かけたりと、それぞれ一日を始めようとしていました。月曜日の朝のことでした。



提供者：広島平和記念資料館

街が消えた…

広い平和公園がある場所は、もとともと繁華街でした。映画館や銭湯、商店が立ち並ぶ、人が集まるにぎやかなところでした。私たちの今と同じように、暮らしがありました。

ナガサキ

1945年8月9日11時2分

死者 約7.4万人 (昭和20 [1945] 年12月末)

広島に原爆が投下される予定地は、北九州の小倉でした。しかし、視界が悪く目標を目視できなかったため、次の予定地の長崎に投下されました。(原爆投下に際しては、目標を目視して記録画像をとることが義務づけられていました。)

読んでみませんか？



中村由一：著
みやおかずたか え
宮尾和孝：絵

わたなべこう き が
渡辺考：聞き書き
こうだんしや
講談社

「差別が戦争を引き起こし、戦争が新たな差別を生む。
本当の平和をつくるには差別をなくさないといけない」

被爆による差別と部落差別の中を生き抜いてきた中村由一さん(82才)。「ゲンバク」と呼ばれた少年が大人になり、自分の体験を伝えることで差別のない世の中が実現することを願って、この本を書く決意をしました。

※小郡市人権教育啓発センターにあります。

へい わ き ねんぞう あらわ <ナガサキの平和祈念像が表していること>

すいちよく たか かか みぎて
垂直に高く掲げた右手は、
げんばく きよう い
原爆の脅威を

かる と め
軽く閉じた目は、
せんそう ぎ せいしやめいふく
戦争犠牲者冥福を

よこ あし
横にした足は、
とう か ちよくご
原爆投下直後の
ながさきし しず
長崎市の静けさを

すいへい の ひだり て
水平に伸ばした左手は、
へい わ
平和を

た
立てた足は、
すく いのち
救った命を



たいせつ
「大切なわたし・大切なあなた」だから…

お ごおり し ないぜんしやうがっこう ねんせい しゅう
小郡市内全小学校の6年生は、修
がくりよう こう い まな
学旅行で長崎に行き、平和について学
び、自分たちの生活を見なおしたり、
ほか がくねん ほ ごしや ちいき ひと はっしん
他の学年や保護者・地域の人に発信
したりしています。



かんそう
6年生の感想

わたし おも よ なか
私が思う平和な世の中をつくるためには、
まず、いじめ・犯罪・差別をなくすことです。
…そのためには、人との関わりをよくすること
です。感情に任せて動かず、時には自分を
おさ せ なか お
抑え、時には自分の背中を押し、うまく自分
をコントロールすることが大切なのです。



平和の思いを引き継いで…

日本初の女性弁護士・「原爆裁判」にかかわった裁判官

みぶち よしこ
三淵 嘉子

三淵嘉子さんは2024年に放映されたTVドラマの主人公のモデルとなった人で、「原爆裁判」の審理にかかわった裁判官です。「原爆裁判」とは1955年に広島や長崎で被爆した人たちが日本政府を訴えた裁判です。

判決は日本政府の賠償責任を認めませんでした、国際法違反を認定し、「国家は自らの権限と自らの責任において開始した戦争により、多くの国民を死に導き、傷害を負わせ、不安な生活に追い込んだ」とし、被爆者救済の必要性を痛切に訴えました。そして「政治の貧困を嘆かずにはおられない」と、被害者に寄り添わない国の姿勢を批判しました。人の生活、命を守る平和憲法のもと、強く戦争の怒りと平和への願いをもった法律家でした。



「別冊太陽 三淵嘉子」
はつこうもと・へいぼんしゃ
発行元:平凡社

そしていま、語り継ぐ…2024年ノーベル平和受賞

日本原水爆被害者団体協議会（被団協）

被団協は1956年に結成され、被爆者の方々が核兵器のもたらす理解を超えた苦痛と苦悩を語り、核兵器は二度と使ってはならないことを訴えてきました。そして、いつの日か「歴史の証人」である被爆者はいなくなってしまうと、その経験とメッセージを語り継ぐ新しい世代が育ち、核兵器の拡散と使用に反対する動きを世界に広めていることがたえられました。受賞式では、「核兵器は人類と共存できない」「人類が核兵器で自滅することのないように！核兵器も戦争もない世界の人間社会を求めて共に頑張らしましょう！」と訴えました。